みんなの広場

アン・ルッヘルス・ファンデル・ルフ作　熊倉美康訳

949.3　みんなの広場

アン・ルッヘルス・ファンデル・ルフ作

熊倉美康訳

岩波書店　1968

256 p.　23 cm　(岩波少年少女の本 3)

小学 4, 5 年以上

An Rutgers van der Loeff : Het wilde land and Ieder land, 1962.

岩波少年少女の本　3

■みんなの広場　　定価一二〇〇円

一九六八年十一月二十五日　第一刷発行 ©

一九七九年四月二十日　第十一刷発行

訳者　熊倉美康

発行者　東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

緑川亨

発行所　101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

電話〇三(二六五)四一一一　振替東京六(二六三四〇

本文印刷　大日本法令印刷株式会社

製本　株式会社松岳社

表紙・箱印刷　錦印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

みんなの広場

アン・ルッヘルス・ファンデル・ルフ作／熊倉美康訳

岩波書店

HET WILDE LAND and IEDERS LAND

by An Rutgers van der Loeff
illustrated by Jenny Dalenoord

Original Dutch edition published by
N. Samsom N. V. in 1961.

This book is published in Japan by arrangement with
the author through N. Samsom N. V., Alphen aan den Rijn.

もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1 町の中のジャングル……9
2 クスクスとアクタレとノッポ……15
3 こっそりやってきたもの……19
4 ぬすまれたぞ！……29
5 テントウムシ……37
6 用心しようよ！……42
7 ずうずうしいなあ！……50
8 ミッキとノッポ、いい争う……57
9 おれたちだって、ここで遊びたいんだ……65

10 コーヒーまめには、用はない！……77
11 いねむりのでる市議会……84
12 荒れ地のすきなおとしより……92
13 やるなら、こい……104
14 広場へいこう……112
15 三十三人と三十三人……121
16 荒れ地はみんなのもの……126
17 荒れ地にたったおじいさん……131
18 三人組とおこりっぽい調査委員……141
19 白いペンキをもった老紳士……150
20 子どもたちが、あやしいのでは？……158
21 おいでなさい、市長さん……166
22 子どもたちのおそれ……174
23 ブルドーザーでやってくる……180
24 三人組から議会へ……187
25 秘密をもったふたり……193

26 アップルパイ……200
27 みんなの広場をまもれ……210
28 よしっ、やろう！……220
29 みんなの仕事はつらい……226
30 あらわれた荒れ地の持主……235
31 ばんざい！　みんなの広場……243
日本のみなさんへ……249
あとがき……253

さし絵　イエンニ・ダレンノールド

みんなの広場

アン・ルッヘルス・ファンデル・ルフ作
熊倉美康訳

1　町のなかのジャングル

ぎっしり立ちならんだ家々にかこまれて、ひろい空き地がありました。あれほうだいの、この目ざわりな土地が、どうしてここにあるのか、それを知っているものは、だれもいません。あるとき、そこを通りかかった人が、こんなことを、つぶやきました。

「ここは、ずっとまえに、火事でもあったのかね？　それとも、戦争のために、こうなったのかね？　どうして、ここを、きれいにかたづけようとしないのだろうねえ。」

なるほど、火事で、すべてが燃えてしまった、ということもあるかもしれません。でも戦争で、爆弾がおとされたために、そうなった、ということも考えられます。それは、この荒れ地のあちこちに、ふかい穴になっているところが、あるからです。その穴も、いまでは、よく見えないくらいになっていました。というのは、その穴のまわりには、草や木が、いっぱい生えてしまったからです。でも、穴は、やっぱりありました。穴のことになれば、子どもたちが、おとなたちよりもよく知っています。

もしかすると、穴の近くにあった、なんげんかの家々は、ずっとまえに、とりこわされたのかもしれません。そして、ふかい穴のほうは、いくつかあったのに、あとで、ひとつのものになってしまっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たのかもしれません。それにしても、たとえ、そのなんげんかの家々が、まえにとりこわされたとしても、くずれかけのレンガの壁までが、いまも残って立っているのは、どういうわけでしょう？

おとなたちは、こういいました。

「ああ、あそこは、ひどいところだ！」

「まったく、目ざわりだ！」

「町のはじだわ！」

「そうよ。だいいち、きたならしいわ。ここへやってくる、観光客たちにだって、はずかしいとおもわない？」

みんなは、そういっていました。新聞も社説で、そのことを書きました。読者からも、新聞社あてに投書がきました。

「わたしたちのきれいな町のなかに、こんなきたない場所があるのは、わたしたちのはじである。」

こんなふうに、手紙には、書いてありました。ところが、いっこうに、ききめがありません。

なかには、あっちやこっちで、えんりょがちな声で、こんなふうに、いう人もいました。

「だけどね、あそこは、子どもたちには、とてもたのしい場所になってるんだがねえ。」

「なにっ、子どもたちだって？　ふん、子どもは、いたずらばかりしてるじゃないか。」

そういったのは、生まれてからいちども、たのしく遊んだことのない男でした。

「それは、ちがいますね。」と、べつな男がいいました。この人は、子どもたちのことを、よく知っているようでした。「子どもたちは、あの広場で遊んでいるんです。それとも、子どもたちが、あそこで遊んではいけないとでもいうんですか？」

いえ、いえ、子どもたちは、大いに遊んでいいはずです。ただ、あの空き地は、ひどくちらかっているので、きれいにかたづける必要があるようです。するとこれは、市長の責任ではありませんか。

人びとは、こういいました。

「そうだろう。きれいにすることは、市長の責任だ。」

「いや、助役にも責任がある。」

「そうそう、助役にだってあるさ。」

「それに、市会議員もだ！」

「もちろんですわ。市会議員にだって大ありですわ。」

「それと、すべての市民もだ。すべての市民にも責任があるんだ。」

そういって、みんなはため息をつきました。そして新聞は、またそのことを書きました。子どもたちといったら、いつものとおり、広場で、元気いっぱい遊んでいました。

ふしぎなことでした。広場が、どうしてきたないのか、それを知っているものは、だれもいませんでした。

「あの荒れ地は、土地のねだんがとても高いんでね。」こういうことに、くわしい人たちがいいました。「いったいあの土地は、だれのものなんだろうねえ?」

ところが、それにこたえるものは、ひとりもいませんでした。というのも、このごろ、なん年ものあいだに、多くの人たちが、よそへ引っこしてしまったので、くわしい事情を知ったものが、いなくなったためでしょう。この広場のまわりにある、大きくて、りっぱなふるい家々には、よほどまえなら、けっして住むはずのないような人たちが、はいっているのです。それも、子どもづれの大家族が、あまりにもたくさん住みついているのでした。おおぜいの子どもたちは、階段や戸口のあがり段のてすりにまたがって、上から下にむかって、つぎつぎと、すべっていました。てすりにぬってあったペンキの色は、もうすっかりはげていました。たしかにこのあたりは、むかしとくらべて、いまではがらりとかわってしまいました。

「あの広場には、きれいな自動車の駐車場をつくらなきゃならないんだ。」

そういったのは、広場のかどに、車庫をもっている男でした。その男は、その場所で、自動車用のガソリンを売りたがっているのでした。

「そうね。もしかして、ちゃんとした託児所が、できるといいわね。」

なん人かのおかあさんたちは、いいました。おかあさんたちのまいにちは、とてもいそがしく、みんなはいつも、ならんで歩く小さい子どもによりかかられて、ため息をつきながら、重い買い物かごを、ぶらさげて、家へ帰っていくのでした。荒れ地は、いまのところでは、年上の子どもたちのものだけに、なっているようでした。

「広場には、歌劇場をたてるべきだよ。」と、薬屋は帳場から、店にきていたお客さんたちにむかって、よびかけました。

そのとき、店にはいってきた、ひとりの年よりが、ふしぎそうに、こういいました。

「しかしだね、あんたたちは、あんな荒れ地のなかで遊ぶのが、とてもたのしいってことを忘れっちまったのかね？」

「ゴホン、ゴホン……。草っ葉のなかなら、さぞたのしいことだろうよ。」

ドロップを買いにきた男が、せきをしてから、しわがれ声で、いやみたっぷりにいいました。

「まあ、あそこへいったら、子どもたちは、きっとズボンをだめにしちゃうわね。」と、おかあさんのひとりも、心配しました。「だってね、あそこじゃ、よそであそぶより、ズボンが二倍もすり切れちまいますからね。」

「だから、どうなんだというのかね？」

さっきのおじいさんが、むっとした調子でたずねました。

「それでは、おまえさんが、子どものやぶけたズボンを、つくろってくれるとでもいうんですか？」

おかあさんも、むっとしてやりかえしました。（ふん、このおせっかいじじいめ。）と心のなかで思ったのでしょう。

「しかしだな、……」と、おじいさんはいいました。けれども、もうだれも、老人のことばを、きこうとしませんでした。

薬屋は、ドロップの目方をはかりおわると、みんなにむかってさけびました。

「いいですか、みなさん。この町に、歌劇場をつくらなきゃなりませんぞ。そうすれば、荒れ地だって、きれいにかたづくというもんだ。」

2　クスクスとアクタレとノッポ

こうして、荒れ地をどうするかについての、みんなの話しあいは、それからも、ずっとつづけられていたのでした。いろいろな人が、いろいろな意見をまくしたてていました。それで、荒れ地のほうは、ますますひどく、あれていきました。そうしてこの土地は、子どもたちにとっては、すてきな遊び場になっていました。子どもたちは、高くのびた雑木のあいだにあった空き地に、ぼろ切れで、テントをはりました。穴もほりました。もとの穴ぐらに、地下壕をつくったりして、そこへじぶんたちのだいじな、宝ものをうめました。子どもたちは、雑木のあいだで、かくれんぼうをしたり、かわりばんこに、泥棒になったり、警官になったりして、怪盗ごっこをして、遊ぶのでした。

フットボールをする場所もありました。そこの土は、子どもたちによくふまれるので、いつも、つるつるになっていました。でも、もっとさきのところでは、草や木が、いきおいよく、生いしげっていました。こわれたレンガ壁が、まだのこったままになっていて、そこには、ナナカマドさえ、生えているではありませんか。

このあたりは、むかしは、庭だったのでしょう。でなければ、ここに、おばけの木が立っているは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com